

羅什訳『法華経』の 語学的研究

—指示詞について—

椿 正 美

0 はじめに

鳩摩羅什訳の経典『法華経』に収録された各指示詞は、それぞれが独自の機能を託されているにも関わらず、意味の区別は曖昧にされ易い。例えば、「此」「是」「之」等は、相互間に存在する微妙なニュアンスの違いが軽視され、単に近称を示す指示詞として同一視される可能性もある。この問題を解決する為には、指示詞の機能について更に詳しく分析し、従来の固定観念に捉われたものとは異なった新しい解釈を求めなければならない。

本稿では、立場を語学的研究に限定し、『法華経』に用いられた指示詞「是」「此」「之」「斯」「為」「其」「爾」「彼」全八種類の機能について古漢語文法の観点から探っていく。

1 調査の方法

漢語の指示詞には、主語として単独使用されるだけでなく、連体修飾語として名詞の前に置かれる用法、また、目的語として前置詞と併用される用法も備えられている。『法華経』の場合、連体修飾語としての使用例には「是因縁（この因縁）」「其果報（その果報）」等、目的語としての使用例には「如是（このように）」「為其（そのために）」等が挙げられる。本稿で扱った指示詞の用法は、これら全ての形式を含むこととする。

調査の方法としては、二種以上の異なった指示詞が連用されている例文を挙げ、各指示詞に含まれた意味を比較することによって、それぞれの機能を明らかにしていく⁽¹⁾。

調査の参考にする為、『法華経』の全指示詞を距離感によって近称、中称、遠称に分類し、それぞれの使用回数を集計した。以下にその表を掲げる。

本稿では、全八種類の指示詞に関して文中の用例を挙げ、近称、中称、遠称の順に分析を進めていく。近称、中称に関しては、該当する指示詞が複数である為、使用回数が多いものから順次扱っていくこととする。

《表 1》

	近 稱					中 稱		遠 稱
	是	此	之	斯	為	其	爾	彼
序品	40	17	1	5	1	12	1	6
方便品	97	33	8	2	1	16	12	0
譬喻品	128	47	14	12	1	50	12	12
信解品	41	28	16	4	1	30	11	2
藥草喻品	27	6	4	2	2	12	3	6
授記品	16	6	0	0	0	20	9	1
化城喻品	88	38	9	3	2	23	28	14
五百弟子受記品	30	11	5	2	3	23	7	2
無学人記品	14	6	2	1	1	9	12	0
法師品	49	23	6	1	0	16	5	1
見宝塔品	38	24	4	2	3	24	15	8
提婆達多品	7	11	1	0	0	3	8	0
勸持品	24	9	1	2	1	5	6	0
安樂行品	56	17	12	6	6	22	6	0
從地涌出品	59	24	3	2	2	17	15	0
如來壽量品	36	19	6	3	1	11	5	1
分別功德品	47	18	1	3	10	17	5	0
隨喜功德品	26	4	3	1	0	13	3	1
法師功德品	44	24	9	1	0	33	7	1
常不輕菩薩品	40	11	4	1	0	9	5	3
如來神力品	21	11	2	1	1	1	4	1
鬻果品	11	2	0	0	1	2	2	0
藥王菩薩本事品	55	26	1	1	11	15	9	3
妙音菩薩品	40	11	1	0	0	12	11	3
觀世音菩薩普門品	29	5	4	0	0	9	14	14
陀羅尼品	17	10	1	0	3	4	6	0
妙莊嚴王本事品	31	9	0	0	0	18	8	6
普賢菩薩勸發品	43	8	6	0	0	17	6	0
合 計	1154	458	124	55	51	443	235	85

尚、典拠は、『大正新脩大藏経』(鳩摩羅什訳)を利用した。⁽²⁾

2 近称

近称を示す指示詞には、「是」「此」「之」「斯」が確認され、この他、「為」も類義語として用いられている。何れも近距離内に存在する事物を示し、我が国の訓読では「コレ」「コノ」または「ココ」「カク」等が適用される類いである。

本章では、「是」「此」「之」「斯」「為」の機能について考察する。

2.1. 「此」「是」

上に示した集計によれば、近称指示詞の中では「是」「此」の使用回数が圧倒的に多い。頻度を見ても、「是」63%、「此」25%、「之」7%、「斯」3%、「為」3%となり、やはり「是」「此」の使用が頻繁である。

「是」と「此」の関係については、『広雅』に「是、此也」とあり、古より両者の同類説が既に認められていた。黄盛璋1983も、「此」「是」に対する文法的区別は困難であり、先秦後期の書では互いの交換すら可能であったと述べている。

ところが、『法華経』の場合、「此」と「是」の使用回数には著しいほどの差が見られる。これは、訳者が「此」「是」双方に含まれた意味を十分に把握し、それぞれの機能に基づいて使い分けした事実を示している。

何故に「是」の頻度は、「此」のそれを凌ぐ数値を示すのであろうか。ここで、「此」「是」の機能について再検討してみたい。

2.1.1. 直接指示と間接指示

指示詞の機能には、事態を直接に指示する「直指」、既に述べた内容を受けて指示する「承指」の二種類がある。「此」と「是」について、呂叔湘1944は、「此」の近指性が「是」に優る点を指摘し、「承指」として用いるには「是」の方が相応しいことを述べている。また、我が国でも鈴木1981、1982は、「是」は「承指」、「此」は「直指」としての機能を発揮する傾向が強く、「是」は間接的、「此」は直接的事物を示す率が高いことを主張している。

このような両指示詞の距離感の違いは、『法華経』の文面にも見ることができる。次に、『法華経』に見られる「此」と「是」を連用した例文を挙げ、比較を試みる。⁽³⁾

- (1) 今此幼童、皆是吾子、愛無偏党。(譬喩品)
- (2) 窮子見父、有大力勢、即懷恐怖、悔来至此、竊作是念、此或是王。(信解品)
- (3) 諸君当知、此是我子。(〃)
- (4) 我等諸宮殿、光明昔未有、此是何因緣、宜各共求之。(化城喩品)

- (5) 汝等当前進、此是化城耳。(〃)
 (6) 当知此人、是大菩薩(法師品)
 (7) 应当聽此經、是經難得聞(〃)
 (8) 此經是一切過去未來現在諸仏神力所護故。(安樂行品)

(2)(3)(4)(5)では、主語「此」の直後に「是」が置かれている。この場合の「是」は、前の「此」と同じ事物を示す指示詞として再度使用され、事物の存在を強調する効果を発揮している。「是」による強調作用を間接指示の一手法と解釈すれば、「此」と「是」との間には「直指」「承指」の関係が成立する。

(1)(6)(7)(8)では、「此」は連体修飾語として名詞の前に置かれ、「是」はその強調効果を発揮している。従って、「此」と「是」の間には、連体修飾語と主語の違いはあるが、上記のような「直指」「承指」の関係を認めることは可能である。

次に、「此」と「是」が異なった事物を示す例文を挙げる。

- (9) 為説是經故、忍此諸難事(勸持品)
 (10) 仏子住此地、則是仏受用。(分別功德品)
 (11) 世尊、是何因縁、先現此端。(妙音菩薩品)
 (12) 若此法師、得是陀羅尼。(陀羅尼品)
 (13) 若有侵毀、此法師者、則為侵毀、是諸仏已。(〃)

(10)「此地」は原因、「是仏受用」はその結果に当たり、(13)「此法師」は手段、「是諸仏」はその成果に当たる。この場合の「此」「是」両者間には因果関係が認められる。また、(12)「此法師」と「是陀羅尼」の間には並列関係が認められる。このように、対象物が異なる場合でも、「此」は直接的、「是」は間接的に事物を指示している。

この他、(9)「是經」「此諸難事」、(11)「是何因縁」「此端」では、他の(10)(12)(13)に見られる使用とは異なり、「此」と「是」の順序が逆転している。但し、「此」が直接的、または重要な事物を指示している点は、本来の条件に合致しているので、例外には当たらない。

このように、『法華經』指示詞の近指性に込められた距離感には、地理的なものに限らず、心理的な意味によるものも含まれている。即ち、訳者は、強調したい部分には「此」を用いた直接的表現を利用し、それを受けた二義的な事物を示す場合に「是」を用いたのである。

2.1.2. 抽象的事物に対する指示

連体修飾語「此」「是」に後続する名詞には、重複するものが多い。例えば、「此」の使用例には「此經」「此衆」があるが、「是」の場合にも同じ名詞を伴った「是經」「是衆」がある。その為、「此」「是」それぞれに後続する名詞の種類に傾向を定めることはできない。すると、『法華經』に用いられた「此」と「是」の使用回数の大きな差は、どこに原因があるのか。それ

は、目的語としての使用に求めることができる。

そこで、目的語「此」「是」の使用例を挙げ、併用した前置詞、動詞によって分類し、それぞれの使用回数を集計した。次にその表を掲げる。

《表2》

於			似		為		見		如		
於 此	住於此	過於此	於 是	以 此	以 是	為 此	為 是	見 此	見 是	如此	如是
15	3	3	13	3	3	1	2	2	1	14	274

上の表によれば、目的語「此」と「是」は、殆どの組み合わせに於いて、使用回数に近いことが確認される。ところが、前置詞「如」との併用では、「如此」の使用は14回であるのに対し、「如是」の場合は約20倍の274回となっている。なぜ「如」が併用された場合にのみ、「是」の使用回数は「此」を大きく上回るのか。

王力1984は、「如此」「如是」の作用について方式的指示、程度的指示の二種類があることを明記し、副詞「如」の機能を明らかにしている。『法華経』の場合、「如此」「如是」に後続する名詞の性質が異なる点に注目したい。例えば、「如是大果報」(方便品)に見られる「大果報」、「演説如是法」(譬喻品)に見られる「法」は、実体を捉えることの困難な抽象的存在である。これに対し、「如此人等、必能敬信」(方便品)に見られる「人」、「与子離別、五十余年、而未曾向人、説如此事」(信解品)に見られる「事」は極めて具体的な存在である。

『馬氏文通』では、「此」の機能は具体的且つ近辺に存在する事物の指示にあると記され、「是」との違いが明確に示されている。⁽⁴⁾ 即ち、「是」の機能は抽象的な事物の指示として位置付けられているのである。

『法華経』を初めとする漢訳仏典の場合、内容が論述性に富んだ文体である為、ある部分は抽象的にならざるを得ない。当然、「此」に託された「直指」の機能では指示の困難な事物も含まれている。その点、「承指」の機能を託した「是」の場合は、指示の内容に柔軟性があるので、抽象的な事物の指示にも適していた。冒頭の「如是我聞」にその効果が表れている。

このように、目的語としての「此」は具体的事物、「是」は抽象的事物を指す場合が多く、それが「是」の使用回数を引き上げた原因と考えられる。この点に関しても、両者の機能はそれぞれ異なるものとして扱われていた。結論として、『法華経』文中では、内容の抽象的性格に応じる為、「是」が多用されていたのである。

2.2. 「之」

「之」は、使用回数が「此」「是」に次ぐ近称指示詞である。但し、本文では連体修飾語「之」と名詞との併用は見られない。然も、主語としての使用は一例に止まり、殆どが目的語として動詞と併用されている。

ここでは、他の指示詞との比較を中心に、「之」の機能について考察する。

2.2.1. 補足作用

周法高1959は、目的語として用いられる「之」の機能について認めると共に、中称指示詞「其」との連用に関しても言及している。その内容は、「其」が重要な位置を占めた場合、「之」は「其」との間に補足関係を形成するというものである。『法華經』文中に用いられる「之」の機能には、この補足作用を託されているものが多い。

補足作用については、呂叔湘1944が「之」の機能が「止詞」と「補詞」に限られることを述べている⁽⁹⁾。また、牛島1967も、「之」が他の語彙と併用されて句を形成する作用を指摘し、動詞の補足成分となることを述べている。

『法華經』文中の「之」は、このような動詞との併用によって補足作用を発揮している。次に、「之」と「是」を連用した例文を挙げる。

(14) 具足菩薩、神通之力、隨其壽命、常修梵行、彼佻世人、咸皆謂之、實是聲聞。(五百弟子受記品)

この文では、仏が弟子の一人である富樓那弥多羅尼子について僧達に話しかける場面が描かれている。「常修梵行」までが富樓那弥多羅尼子の功績に関する部分であり、「彼佻世人」は主部、「謂」が述語に当たる。「實是聲聞」に内容の重点が置かれ、「是」は富樓那弥多羅尼子の存在を表している。

文を構成する為には、主部「彼佻世人」と「實是聲聞」とを述語「謂」によって結ばねばならない。そこで以上の三要素を結ぶ為、要として「之」が置かれている。従って、「之」の効力は、本文を構成するための補足作用と捉えられる。次に、「之」と「此」を連用した例文を挙げる。

(15) 禽獸鳴相呼、其說法之人、於此悉聞之。(法師功德品)

この文では、主語が「其說法之人」、述語が「聞」となる。「於此」は条件を示し、「之」は「其說法之人」と「禽獸鳴相呼」とを「聞」によって結ぶ要として置かれている。この場合にも、「之」には補足作用が認められる。

(14)(15)何れの場合も「之」は目的語として動詞の後に置かれ、文を構成する為の補足作用を発揮している。

2.2.2. 「是」との類似性

先に掲げた(4)「我等諸宮殿、光明昔未有、此是何因緣、宜各共求之」では、「此」「是」「之」の対象は全て「我等諸宮殿、光明昔未有」に集中している。それぞれの機能について見れば、「此」は「直指」、「是」は「承指」によって指示し、「之」の機能は文を完結させる為の補足作

用と捉えられる。しかし、間接的指示という機能について見た場合、「之」の内容は「是」との間に共通性を有し、「是」は寧ろ「之」に近い。

呂叔湘1980は、実在しない事物の代用機能を「之」に認め、これを「虚用」と称している。この指摘によれば、「之」は抽象的事物の指示傾向が強く、「唯願説之」（方便品）、「諸人聞已、輕毀罵詈、不輕菩薩、能忍受之」（常不輕菩薩品）にその使用例を見ることができる。

このように、「之」の機能は抽象的事物の指示、即ち「承指」の機能に関しては、「是」との間に類似性が認められる。従って、「之」は「承指」の機能を含む指示詞として「是」に次ぐ存在だったのである。

2.3. 「斯」

「斯」は、『法華経』本文中での使用頻度は3%に過ぎず、回数が極めて少ない近称指示詞である。使用回数55のうち、単独使用は主語としての使用6回、目的語としての使用10回となっている。ここでは、他の近称指示詞との比較を中心に、「斯」の機能について探る。

『詩経・采芣苢箋』には「斯、此也」とあり、「此」との類似性が既に認められていた。ところが、『法華経』文中に於ける両者の使用回数には大きな隔たりがある。然も、本文中には「此」と「斯」が連用された文は一例も見られない。類似した「此」と「斯」に対し、訳者は意図的に連用を避けているのである。ここでは「斯」が避けられた理由を解明し、その指示機能について探る。

まず、「斯」が主語として用いられた例文を挙げる。

(16) 有見諸仏士、以衆宝莊嚴、瑠璃頗梨色、斯由仏光照。(序品)

文中の「斯」は、全体の中心部に当たる「瑠璃頗梨色」までの現象を示し、その機能は「此」と同じく直接的と捉えることができる。この事実から、「斯」が「此」の代用として用いられた可能性も考えられる。

次に、「如」との併用例を挙げ、目的語としての使用について探る。

使用回数を確認すると、「如此」は14回となっている。ところが、「如斯」の使用は6回、類義の「若斯」も2回に止まり、「如此」に比べ遥かに少ない。

また、これらの複合語の連用に関して見た場合、『法華経』文中に「如此」と「如斯」の連用はあり得ない。理由は、「斯」が「此」の代用として存在する場合、「如此」と「如斯」の連用は類義語の重複に当たるからである。しかし、文中に「如是」と「如斯」の連用は存在する。この存在は、「是」と「斯」の内容が異なることを意味している。この結果から「此」「斯」類似説の可能性は高いと考えられる。

次に、この「如是」「如斯」を用いた例文を挙げ、比較を試みる。

(17) 如是等罪、横羅其殃、如斯罪人、永不見仏。(譬喩品)

「如是」は抽象的事物である「罪」を表すのに対し、「如斯」は具体的事物である「罪人」を表している。この場合、「斯」は「直指」の機能を発揮するので、「此」と同類と判断される。

従って、「斯」と「此」には類似性が確認される。この類似性の為、訳者は「斯」「此」の同文中での連用を避けていたのである。

2.4. 「為」

『論語』「微子篇」に「問於桀溺、桀溺曰、子為誰、曰、為仲由」とある。この「為」は動詞として「～と為す」との解釈もあるが、「コレ」と訓読し、近称指示詞として解釈することもできる。

『法華経』全文中には、この指示詞「為」の使用が見られる。但し、使用回数は、近称指示詞の中で最も少ない51回である。また、全てが単独使用であり、連体修飾語として名詞と併用された例は見られない。ここでは、近称指示詞として用いられた「為」の機能について探る。

『法華経』文中に見られる指示詞「為」の使用には、「我為仏長子」(方便品)のように、主語に後続して文を構成する形式が見られる。この場合の「為」は、直前に置かれた名詞を強調する効果を発揮している。

次に挙げる例文は、指示詞「為」と近称指示詞「此」、「斯」、「是」との連用が見られるものである。

(18) 諸善男子、各諦思惟、此為難事、宜発大願。(見宝塔品)

(19) 斯人則為、頂戴如来。(分別功德品)

(20) 是則為具足、一切諸供養。(〃)

(18)では、同じ近称指示詞である「此」が主語として用いられ、後続する「為」は主語に対する強調作用を發揮している。その内容は、「此」の指示対象となる「諸善男子、各諦思惟」と述部に当たる「難事」の連結を補助するというものである。

間接指示に当たる「是」に強調作用が含まれる点については、既に述べた通りである。近称指示詞として使用される「為」の強調作用をこれと同等に捉えるならば、「是」との類似性についても可能性が認められる。すると、(18)に見られる「此」と「為」の間には、当然、「此」と「是」に見られるものと同様の関係が保たれ、両者間に「直指」と「承指」の関係が形成されることになる。従って、この例文中では、「為」の機能は「是」の代用と解釈することもできる。

(19)では、連体修飾語「斯」と名詞「人」の連結によって主部が構成され、述部に当たる「頂戴如来」との間に「為」が置かれている。この場合、「則」を隔てた「斯人」と「為」には、同じ成分としての対応関係が認められる。しかし、その関係は〈指示詞+名詞〉(「斯人」と「為」)と〈指示詞〉(「為」)の間に成立したものであり、「斯」と「為」の両指示詞に「直指」と「承指」の

対等関係が認められたわけではない。「為」の機能には、主部「斯人」に対する強調作用が含まれるが、他の指示詞の代用としての効果が認められたわけではないのである。

㉑「是則為」では、「是」と「為」の間に同様の関係が認められる。「為」は㉑と同様に「則」によって主語である「是」と連結され、「是」に対する強調作用を発揮している。

このように、『法華經』文中に於ける「為」は近称指示詞としても活用され、間接指示の機能を発揮する。その効果には、他の指示詞に対する強調作用も含まれている。

3 中称

『法華經』文中で用いられる中称指示詞には、「其」と「爾」が確認される。「其」を遠称指示詞、「爾」を近称指示詞とする解説も見られるが、本稿では、この二語を中称指示詞として扱うこととする。その根拠については後に触れる。

3.1. 「其」

「其」は、近称を示す「此」「是」と共に文語文の中で多用される指示詞であり、名詞の前に置かれて主語、述語、目的語を構成する。また、方位詞の前に置かれ、場所や方角を示す効果も発揮している。ここでは、中称指示詞「其」の機能について探る。

王力1990は、連体修飾語「其」の機能を「非近指」「非遠指」と定め、指示対象が近距離、遠距離の地点に存在することを否定している。また、牛島1967は指示代名詞を直接指示、間接指示、不定指示に分類し、「其」を間接指示に入れている。この場合の間接指示とは、既に提示した個体を聞き手に示す作用であり、「其」の使用目的として話し手が個体を暗示することが挙げられる。

このような各指摘による指示対象との実質的距離感、また心理的距離感に基づけば、「其」の機能は間接指示と捉えられる。従って、本稿では「其」を中称指示として認める。

『法華經』文中には、当然、「其」と距離感の異なる他の指示詞との連用も見られる。次に、近称指示詞との連用が見られる例文を挙げる。

- ㉑ 如来所以出、為説仏慧故、今正是其時。(方便品)
- ㉒ 忽於此間、遇会得之、此実我子、我实其父。(信解品)
- ㉓ 日夜思惟、精勤修習、是時諸仏、即授其記。(〃)
- ㉔ 如是供養者、得無量功德、如虚空無辺、其福亦如是。(分別功德品)
- ㉕ 十方世界中、禽獸鳴相呼、其説法之人、於此悉聞之。(法師功德品)
- ㉖ 諸樹華菓実、及蘇油香氣、持經者住此、悉知其所在。(〃)

㉑㉒㉔では「是」、㉖では「此」、㉒㉓では「此」「之」が中称指示詞「其」との連用を見せている。それぞれの指示詞に含まれた「直指」「承指」の機能は、「其」との連用に於いても発揮

されている。

㉑では、「是」は主語、「其」は連体修飾語として用いられている。名詞である「是」は時間を表す「今」を示し、中称指示詞と名詞との結合による「其時」は結果に当たる。

ここで注目すべき点は、近称指示詞「是」と中称指示詞「其」との関連である。指示対象との距離感は異なるが、「是」は抽象的事物である時間を表し、「其」は「時」の内容の説明として「説仏慧」を指示している。また、「其」は「是」「説仏慧」「時」の各要素を関連づける効果も発揮している。

先の牛島1967に見られた間接指示の機能は、先行詞の存在が前提条件となるが、㉑の場合、「説仏慧」が既に記されているので、条件は満たしている。従って、「是」と「其」は距離感は異なるが、間接指示の機能に関して見れば、両者は類似すると考えられる。

㉒では、「此」が連体修飾語として「間」の前に置かれ、現地点である「ここ」を表す。この他、「此」は主語として「我子」も示している。「子供」を表す近称指示詞は、他には「之」が目的語として用いられている。

㉑で「是」が見せる時間的概念の指示機能に比べ、「ここ」や「子供」を表した㉒の「此」の機能は具体的である。また、同じく「子供」を示す目的語「之」は、補語としての効果を発揮している。このような近称指示詞の連用に続き、中称指示詞「其」は、「我子」と「父」の関係を明確にする為の要として用いられている。

㉓では、「其」は「供養者」、「是」は「虚空無辺」を指示対象としている。「供養者」は先行詞として提示され、それを受けて用いられた「其」は間接指示の機能が発揮されている。抽象的な表現である「虚空無辺」は、適した指示詞である「是」によって示されているので、「其」「是」の二語は、共に間接指示の機能を含むと考えられる。

このように、中称指示詞として用いられた「其」は、既に述べた内容の先行詞に対し、間接指示の機能を発揮する。その指示内容に関しては、上の各例文に見られる近称指示詞との比較によって知ることができる。

3.2. 「爾」

「爾」は、「其」と同じく中称を示す指示詞として用いられている。動作、状態、方式等を表し、「そのように」と訳される類いである。ここでは、中称指示詞「爾」の機能について探る。

『法華経』全文中には、「爾」と他の指示詞との連用は一例も見られない。本稿では異例であるが、「爾」の用法に関しては、単独に使用された機能について探っていく。

『法華経』文中の「爾」の使用は235回である。しかし、その中の233回は連体修飾語として用いられ、然も後続する名詞は全て「時」となっている。その他に「爾之時」1回があるが、これは同義語と見られる。

残る1回は「爾来」であり、これについては次の例文が挙げられる。

㉒ 常説法教化、無数億衆生、令人於仏道、爾来無量劫。(如来寿量品)

この場合の「爾来」は、「それ以来」の意を表し、「爾」には時間詞的な意が含まれている。その用法は、先に挙げた「爾時」「爾之時」にも見られる。つまり、訳者は、時間に関する中称指示詞の必要時に限り、「爾」を用いたのである。

同じ中称指示詞の「其」も、先に挙げた㉒の文中で「其時」を形成しているが、『法華経』全文中、「其時」の使用は「方便品」に見られる2回のみである。従って、『法華経』訳者は時間を示す中称指示詞としては「其」より「爾」を優先したのである。

『法華経』文中の「爾」の用例は種類に乏しく、分析は非常に難しい。ここでは時間を示す中称指示詞としての性質に限定し、『法華経』での用法について紹介した。

4 遠称

『法華経』文中に見られる遠称指示詞では、主語、または連体修飾語として用いられる「彼」が確認される。本章では、「彼」の機能について探る。

連体修飾語「彼」の使用回数は、後続する名詞によって分類した場合、「彼仏」の19回が最も多く、「彼観音力」の13回がそれに次ぐ。名詞「仏」「観音力」から判断すれば、指示詞「彼」は憧憬や崇拜の対象を指示する傾向が強い。このような種の指示対象の位置は、心理的には当事者の位置から遠距離に当たる。

心理的距離感による遠称指示詞「彼」は、『詩経』中の作品でも既に用いられている。「碩鼠」の文中では、「彼楽土」「彼楽園」「彼楽郊」の部分に見られ、何れも現実から遠く離れた理想郷を表現している。

この「彼」に含まれた遠称の指示機能は、訳者が抱く心理的距離感に基づいたものであり、抽象的事物の指示に多用されていた。先にも触れたように、漢訳仏典の内容には抽象的な描写が多く、「彼」のような表現はそれに適していたと考えられる。

ところが、指示詞全体の中で遠称の使用は少なく、それは『法華経』の場合も同様なのである。この原因について、王力1984は、古の人々が近称指示詞の多用、遠称指示詞の少用を好んだ可能性を指摘している。また、鈴木1983は、「彼」は内的なものに對立する意識が強く、疎外感を覚える為、使用を避けられた、と述べている。

『集韻』には「彼曰、對此之称」との記載があり、「彼」は近称指示詞「此」とは対象的な価値を含む種として存在が認められていた。このような対立関係にある「彼」と「此」の連用は、文学作品の中にも見る⁽⁶⁾ことができる。

次に、『法華経』の文中で「彼此」の連用が見られる例文を挙げる。

㉓ 無有彼此、愛憎之心。(葉草喻品)

指示詞の併用は、先に述べた「此是」にも見られる現象である。

「此」と「是」の場合、両指示詞は共に近称指示詞に属し、それぞれの機能は、直接的、間接的指示と認められている。両者の存在は、「直指」「承指」の関係にあり、そこには並列の関係が成立している。ところが、「彼此」の「彼」と「此」には、距離感の段階で既に遠称、近称の区別が生じているので、両者は対立した関係にあると認めねばならない。然も、指示機能は共に「直指」を含んでいるので、「彼此」の「彼」と「此」は対等の関係にあると考えられる。

このように、「彼」は近称指示詞「此」とは対等関係にある概念を示し、実質的、または心理的基準による遠距離感を表現する。

5 おわりに

以上、本稿では『法華経』で使用された全指示詞を距離感によって分類し、それぞれの機能について探った。調査は、他の指示詞との比較によって生じた差異を分析する方法を採った。

その結果、複数の指示詞が運用される文では、指示詞の間に様々な関係が成立することが分かった。例えば、近称指示詞「此」「是」には直接的指示、間接的指示の機能が託され、〈直指〉〈承指〉の関係が成立していた。この場合、「此」と「是」は並列関係にあるが、「此」は遠称指示詞「彼」との間には対立関係を成立させている。

また、指示対象となる事物の存在が具体的であるか、抽象的であるかによっても使用が区別されることも明らかになった。文中でも述べたが、漢訳仏典の内容は表現に抽象的な部分が多く、具体的事物に対する場合とは異なった表現方法が用いられている。これは『法華経』を初めとする全ての仏典の特徴として認められる部分である。

最後に、『法華経』で使用される指示詞は、文中で他の名詞や指示詞に対して様々な効果を発揮することも特徴として挙げられる。その効果には、補足作用、強調作用等があるが、使用する指示詞の選択は訳者の主観的判断に基づく部分が多い。

〈注釈〉

- (1) 複数の語彙を比較して意味を分析する方法は、黎錦熙1958が行っている。各指示詞の機能の調査にも、比較によって生じる差異の分析が適すると判断し、本稿ではこの方法を採択した。
- (2) 巻数不調である為、欠落部分が生じた場合には、『添品法華経』によって補充し、岩波書店の春日本も参考とした。
- (3) 近称指示詞の比較調査は、前出黎錦熙1958が同じ文の中で使用された「是」と「之」の比較を試みている。
- (4) 同書「実字卷之二、指示代字二之三」からの引用。全文は次の通り。「前文事物有形可跡、且為近而可指者、以“此”字指之」。
- (5) 「止詞」は目的語の意。「補詞」は述語を補足する機能を備えた語の意。
- (6) 『孟子』「公孫丑章句」には「彼一時、此一時也。五百年必有王者興。其間必有名世者」とあり、「あの時」と「この時」の異なった時間帯がこの二語によって区別されている。また、杜甫の「哀江頭」には

「去住彼此無消息」とあり、去り行く者(玄宗)と留まる者(楊貴妃)の立場の違いが「彼此」と表現されている。

〈文献目録〉

- 牛島徳次1967、「指示代詞」、『漢語文法論(古代編)』、181—193頁。大修館書店(1967.1)。
王力1984、「指示代詞」、『王力文集』第一卷、294—304頁。山東教育出版社(1984.11)。
王力1990、「指示代詞」、『王力文集』第十一卷、87—101頁。山東教育出版社(1990.3)。
黄盛璋1983、「先秦古漢語指示詞研究」、『語言研究』第2期、136—157頁。
朱德熙1982、『語法講義』。北京：商務印書館(1982.9)。
周法高1959、『中国古代語法』。台北：中央研究院歷史語言研究所(1959.8)。
鈴木直治1981、「“此”について」、『金沢経済大学論集』第15巻第2号、155—181頁。
鈴木直治1982、「指示詞としての“是”について」、『金沢経済大学論集』第16巻第1号、401—423頁。
鈴木直治1983、「“彼”について」、『金沢経済大学論集』第16巻第2、3合併号、105—133頁。
段徳林1990、『実用古漢語虚詞』。山西教育出版社(1990.9)。
藤堂明保1953、「上古漢語に於ける指示詞の機能」、『藤堂明保中国語学論集』所収(1987.3)、汲古書院。
呂叔湘1944、『中国文法要略』。上海：商務印書館(1944.2)。
呂叔湘1980、『現代漢語八百詞』。北京：商務印書館(1980.5)。
黎錦熙1958、『比較文法』。科学出版社(1958.1)。